

Title	ハンザ出現前のゴオトランドの通商 : Siegfried Mews: Gotland's Handel und Verkehr bis zum Auftreten der Hausen (12. Jahrhundert). Greifswald. 1937.
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.3 (1938. 3) ,p.409(153)- 416(160)
JaLC DOI	10.14991/001.19380301-0153
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380301-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て住んでゐることが一層かうした紛擾を大ならしめた。このことはすでに早くから現れてゐたと見え、徂徠なども、その著「政談」で指摘してゐる。「百年以來地頭知行所ニ不仕住ユヘ、頭ヲ押ル者無テ、百姓殊ノ外ニ我儘ニ成タリ、御旗本ノ武士小身ナレバ、自身不仕住ハ江戸ヨリ知行所ノ仕置スルコトナラズ、代官ナド遣シテモ、小身者ノ家來若黨風情ノ者ナレバ、何ノ用ニモ立ズ、自ラ私領ヲモ公儀ヨリ治ル様ニ成テ、彌地頭ヲ輕ズルコトニ今ハ成タリ云々」と述べ、所謂武士土着論を主張してゐるのである。

上述の訴状を見ても、陽に地頭を尊敬してゐるやうではあるが、陰にはこれを輕侮してゐる様子が見える。最後の訴訟が如何なる判決を受けたか、これを知るべき資料はないが、その吟味願には明かに名主兵五郎を庇護してゐる。財政難を通じて、名主又は豪農と小身領主とは密接不離の關係を生じた。この種の例はかなり多い。従つて前掲の訴状吟味願に現れたやうに、反對派は不當不法の行爲をなす者とのみ解することは出来ない。勿論彼等も權力を得れば種々な不正の役徳をやつたことであらうが、兵五郎の方にも少なからずさうした行爲があつたと見做すことが出来る。要するに權力をめぐる利慾を中心とせる争闘であり、何れを是とし、何れを否とすることも出来ない。徳川時代村落生活の暗黒面であり、又封建的統治の没落過程を語る一資料たり得るであらう。

(昭和十三年一月十三日稿)

ハンザ出現前のゴオトランドの通商

— Siegfried Mews: Gotlands Handel und Verkehr bis zum Auftreten der

Hansen (12. Jahrhundert). Greifswald. 1937. —

高 村 象 平

バルト海に浮ぶ「廢墟と薔薇の町」ゴオトランド島のヴィスビーが、中世初期の南北兩歐商品の一大集散地として、更には「ゴオトランドを訪れる獨逸商人團體(communes mercatores Gullandiam frequentantes)」の結ばれた地として、中世經濟史上重要な地位を占めて居ることは縷説する迄もないであらう。例へばあの獨逸ハンザの成立に、この町の演じた役割が極めて大きかつたこと周知の事實である。だが、従來多くの中世經濟・商業史書はこのヴィスビー乃至ゴオトランドに就いては何等か關説されて居るものゝ、扱て獨立の研究と云ふと、餘り多くないといふのが實情であつた。いま瑞典語乃至丁抹語による研究を除けば、單行の研究書や論文には次のものが存することを私は知るのみである。

Almgren, O. und Birger Nerman: Die ältere Eisenzeit Gotlands. (Stockholm, 1923.)

Frensdorff, Ferdinand: Das Stadtrecht von Wisby. (Hans. Gbll. 1916. S. 1-85.)

ハンザ出現前のゴオトランドの通商

- Hofmeister, Adolf: Heinrich der Löwe und die Anfänge Wisbys. (Zt. f. Ver. f. Lübeck. Gesch. u. Altertumskunde. 23. (1926) S. 43-86.)
- Kjellin, Helge: Die Hallenkirchen Estlands und Gotlands. (Lund. 1928.)
- Kjellin, Helge: Die Kirche zu Karris auf Ösel und ihre Beziehungen zu Gotland. (Lund. 1928.)
- Kruse, Wilhelm: Lübeck und der Streit um Gotland, 1523-1526. (Hans. Gbll. 1913. S. 337-416; 1914. S. 463-478; 1915. S. 229-262.)
- Nerman, Birger: Der Handel Gotlands mit dem Gebiet am Kurischen Haf im 11. Jahrhundert. (Prussia, Zt. f. Heimatkunde u. Heimatschutz. 29. (1931) S. 160-173.)
- Nerman, Birger: Die Völkerwanderungszeit Gotlands. (Stockholm. 1935.)
- Rosvel, J.: Die Kirchen Gotlands. (Stockholm. 1911.)
- Rosvel, J.: Die Steinmeister Gotlands. (Stockholm. 1918.)
- Rosvel, J.: Westfälisch-gotländische Beziehungen in der Architektur des 13. Jahrhunderts. (Hans. Gbll. 1928. S. 1-30.)
- Ropp, Goswin von der: Zum Wisbyschen Seerecht. (Hans. Gbll. 1889. S. 197-200.)
- Schlüter, Wolfgang.: Zwei Bruchstücke einer mittelniederdeutschen Fassung des Wisbyschen Stadtrechts aus dem 13. Jahrhundert. (Mitteilg. d. Ges. f. Gesch. u. Altertumskunde d. Ostseeprovinzen Russlands. 18. (1907))
- Schlüter, Wolfgang.: Zur Geschichte der Deutschen auf Gotland. (Hans. Gbll. 1909. S. 455-473.)

従つていまジックフリード・メウス氏の表記の研究を、この中に加へることが出来たことは、私にとつて公私兩様の意味で喜びとするところである。即ち第一には云ふ迄もなく、中世北歐商業の研究に對して一つの貢献がなされたといふ意味で、第二には、私は著者を知つて居り且この書の公刊がかねて私の期待するところのものであつたといふ意味に於いてある。私がメウス氏と知つたのは、一昨年の夏、一會員としてライン下流のウエゼル市で開かれたハンザ史協會年次大會に出席した時であつた。同氏は伯林大學ワルター・フォオゲル教授の門下、ルウネン文字の研究に詳しい。この大會で、カプタイン教授が「新出土物によるゲルマン・ルウネン文字の起源と來歴」に就いて報告があつた際、私はメウス氏の批判を聞いて教へられるところ甚だ多かつた。その後同氏は私に、近くその研究を發表する豫定の旨を告げられたが、それがこゝに紹介しようとする「ハンザ出現前のゴットランドの商業と交通」と題する勞作なのである。

多くの塔を持つ城壁と蔓薔薇に蔽はれた十七の古寺院の廢墟とによつて、嘗ての繁榮を偲ばせて居るヴィスビー、乃至それが所在するゴットランドの古き時代(十二世紀以前)に就いての研究は、先づ何よりも出土物乃至金石文字の検討を以てせねばならない。それは嘗てデイトリッヒ・シエファア教授がヴィスビーに就いて左の如く引用されて居る通りである。„ Könnte die Geschichte davon schweigen, tausend Steine würden redend zeugen, die man aus dem Schloss der Erde gräbt.“ このことは、この島に關する前記諸文献の表題を寓目しても容易に了解されることであらう。メウス氏も亦この方法を採る。この書が、紀元前約五千年に於けるゴットランド東岸定住から、獨逸東方植民運動に至る迄を取扱ふものである以上、これは至當のことであつたと云はねばならない。資料の關係上、本書に於いては謂ゆるヴィキング時代(八〇〇—一〇六〇年)と、ゴットランドに於ける基督教傳播の初期(八〇〇

一一〇〇年)とに最も多く紙数が割かれて居るが、以下私はメウス氏の説く要點を摘記しよう。

この島が對岸の瑞典本土と交渉を持つやうになつたのは紀元前三世紀の中葉以來であり、そしてゴートランド石器時代の終りには遙か北海地帯に進んだ形跡があるが、然し他方フィンランド乃至バルト海諸地に移出し始めたのは紀元前二十世紀のことであつた。青銅時代には伊太利と交渉あり、又この期にゴートランド人の用ゐた舟には既に櫓が具えられて居たと推定される。紀元前五世紀ゴートランドは中歐・南歐と密接な關係を持したが、當時琥珀取引の中心地はザムランドであり、従つて對南歐商業路の起點はワイタセル河口であつた。この頃から紀元にかけてゴート人は、オオデル、ワイクセル兩河の中間のバルト海南岸へ、或はそれを越えて更に東方へと移つたが、これと行を共にするゴートランド人も少くなかつた。

次に謂ゆるロオマ・鐵器時代に於けるロオマ人と北方人との交易に就いては、敢てこゝに述べる迄もない。この交易の主要擔當者はフリースランド人であり、その對英蘭・對北歐通商の起點は、ユトレヒトに近き *Vedter* (*Fectio*) であつたと推定される。そしてゴートランドは、紀元二世紀の交バルト海に於ける一大取引中心地となつた。しかもこの地の交易上の重要性を更に加へるものに、この頃ゴートランドで行はれ始めた鐵加工があつた。鐵鑛石は恐らくズメランドから輸入されたものらしい。その他この期には、ニイダム舟の建造方法がゴートランドに傳へられ、更にこの島にルウネン文字が入つて來た。後者は從來スカンデナヴィア西部からこの地に移されたと云はれて居るが、然しこの島とワイクセル地帯との密接な關係から推して、同地帯から直接此處に傳へられたものであらうと、メウス氏は説いて居る。

五世紀乃至九世紀の謂ゆる民族移動時代を通じて、南方にその居を定めたゲルマン人と、その北方の故土にある

ゲルマン人との間の交渉は密接であつたが、ゴートランドと南歐との連絡も亦決してこの例外たるものでは無く、その結果北歐には鑛貨・環等の形態で金が流入した。五世紀には人口増加の爲め、ゴートランド住民の三分の一は抽籤によつて他に移出する。彼等はロシアに、更にギリシヤに至る者もあつた。しかもこの後ゴートランドの植民運動は引き續いて行はれたが、それは、五世紀から九世紀後半に至る迄この島が瑞典に併合されて居り、この支配者の壓迫に對する反動として、自由を求めて生じたものでもあつた。レツトランドのグロオピンに於けるゴートランド人居留地と中部瑞典人居留地との隔離は、この兩者間の關係が圓滑でなかつたことを證明するものである。このグロオピン以外にバルト海地域に於ける取引中心地としては、ピルカ、トルツ、ユムネ、レリック等があつた。他方ゴートランド人は諾威地方の者と組合つて北海地域に進んだが、この共同航海は、ゲルマン人の典型的な生活形式たる *Genossenschaft* の具體化たるものである。外來者を敵視するを常とした當時に於いてこれは必要であつた。更にこの民族移動時代に、從來の撓走は帆走に移る。前記の如くゲルマン人に帆の利用は既に知られて居た。然し帆船の利益は、その航海が長距離となる時明白となるのであり、従つてこれはこの時代、更にこれに續くヴィキングア時代に一般化されるやうになつたと云はねばならない。

ヴィキングア時代が北方史乃至ゴートランド史に於いて有する特徴は、この期にスカンデナヴィア諸地(従つてゴートランドにも)に西歐的意味の都市の出現したこと、そしてこの期の終りにバルト海地域に基督教が傳播されたことである。先づヴィキングア時代に於いてはフリースランド人がスカンデナヴィア諸民族の經濟的開發を擔當し、そしてこの後者が商人として自主化し得るやうになつた時、前者は退いたのであるが、それは恰も後年の獨逸ハンザとスカンデナヴィアとの關係に似る。このフリースランド商人がバルト海地域へ進み入る最初の出帆港とし

て選んだのは、リベンであった。その後九世紀初葉ユットランド半島を横断する商業路が、アイダア——シュライ線に移るに伴ひ、こゝにスリアットルプ(後のシュレスウィッヒ)及びハイトハブウ(Stadt auf der Heide, Heideby)が北方交易の中心地として出現するに至つた。兩者共にレリックが丁抹王ゲットリックによつて破壊された後それに代るものとして、フリイスランド商人が建設したのである。彼等が北歐に進出したのは、西歐に於いて渴望される毛皮を求めてであり、更にアラビア人の地中海封鎖によつて東西兩歐の交易がロシアを経て行はれるやうになつたので、この東洋商品を西歐の消費者に運ぶ爲めに、フリイスランド商人はバルト海東部に多くの商業居留地を設けたのであつた。しかもこれによつて九世紀にゴートランドは、ビルカ(Björkö)に對立して東西交易の中心地となる。それはこの商業路線上に於ける有利な位置に基くこと多く、斯くてその農民(farmen)はゴートランド商業擔當者として、先づヴィスビー(=Ort des Heiligums [vi])を交易中心地として成立せしめ、又海を渡つてビルカ、ハイトハブウ、スリアットルプ、ユムネ、ヴィネタ(後のウォリン)、トルツ(エルピングやダンチヒはこの後繼者である)に於いて交易した。

九世紀以降ゴートランド人は、バルト海東部乃至西ロシア地域に武器や馬を供給した。彼等がロシア、更にコンスタンチノオブルに至る通商の跡を示すものは、出土物やルウネン碑文の外に謂ゆるネストオル年代記(この年代記の意義に就いては W. Kljuschewskij, Geschichte Russlands, Bd. 1, S. 65 ff. 参照)があり、ヴォルガ或はドニエプル商業路上に於ける地名の研究がある。この後者に就いてメウス氏は Warangen, Waräger, Rus を北方起源とするノルマン學説を採つて居る。このヴォルガ乃至ドニエプル線によるヴィキングアの東洋交易は、十一世紀中葉まで續いた。これがこの期に止んだ理由は從來種々擧げられて居るが、その主要な原因は基督教の異教克服で

ある。しかもこの結果ワイクセル中流・上流地域に北方人の定住地が発生し、又キエフ——南獨逸(レエゲンスブルク、グラン)商業路が重要となるに至つた。

この他方に於いてゴートランド商人は、七、八世紀の頃からシェットランド、オオクニイ諸島を訪れ、又マン島との間に密接な通商関係を結んだ。この通商が持つ最大の意義は、これによつてゴートランド人が基督教を知つたことであり、又造船技術が進歩したことである。後者を端的に示すものは出土物の外に Stenkryka の石碑があるが(これは昨年来刊行された季刊雑誌 Tomshög の表紙に掲げられて居ることを附け加へて置く)、櫓と龍骨との固着、クリンカー張り等を主とするものである。更に十一世紀にはゴートランドとブクッ(後のリュベック)との間に交易關係が発生した。

これ等の交易と、ヴィキングア(ゴートランド人も含む)の掠奪とによつて、バルト海北部に流入した富は、舊來の土地所有關係を變化せしめた。瑞典本土ウップランドに於ける Jarlabanke ゴートランドに於ける Botajr von Alaback は、いづれも富める商人の大地主への轉化を示すものとして代表的なものである。しかもこの後者は、ゴートランドに最初の基督教寺院二つを建立して居る。前記の如くゴートランドに基督教が傳つたのは、その商人と共に傳道僧が來往したからであるが、その端緒は大約十世紀の中葉に求められる。そして全島が改宗する迄にはその後約一世紀餘の時日を必要とし、(この點アイスランドとは正反對であつた。)十二世紀に至つてリントケピング司教區に編入されたのであつた。尙この島とオラフ治下の諸威との密接な關係は、ゴートランドの教會建築にも現はれて居る。即ち初期のそれ等は木造の謂ゆる Stenkirchenbau であつた。これが石造となつたのは十二世紀以後のことであり、この建築材料の一部としてルウネン碑石が利用されたので、十一世紀中葉から十四世紀に亘るそれ

は残存すると少いといふ結果を見て居る。

ヴィキングア侵略の餘波は、スカンヂナヴィア十字軍として、更にはウェンデンランド人及びエストランド人のバルト海北方地域に於ける掠奪となつて現はれる。後者はいづれも十二世紀にその最高頂に達したが、しかもウェンデンランドのそれは、謂ゆる獨逸東方植民運動によつて促されたものであつた。(Vgl. W. Vogel, Geschichte der deutschen Seeschifffahrt. Bd. I. S. 159 ff.)この西獨逸人口の増加の結果たるその東方進出が、ゴートランドにとつて意義を持つのは、これによつて既に存したリュベックとの通商關係が一層密接となつたことであり、又ヴィスビネが北歐交易の中心としての繁榮により従来の定期的市場地から都市に高められ、さうに居留地を有せる獨逸商人が前記の團體(商人ギルド)を結成したことである。この謂はど正規的交易の開始によつてゴートランドからは、武器、美術手工品(木彫)、洗禮盤等が著しく輸出された。鐵鑛は、島から多く輸入されたのであり、この採掘には獨逸人が少からず参加して居た。この外にゴートランドは、獨逸植民運動の一派たる瑞典本土への進出に際して、その仲繼地ともなつたのであつた。

扱て、著者メウス氏は本書に於いて、北歐乃至西露の諸地名考證に多くの力を注ぎ、それ等の中で北方起源のもの多きことを力説して居る。そしてこれを助けるものに、前記の謂ゆる考古學的吟味がある。これは現在の獨逸史界の學風の一特徴を現したものと考へられるが、この場合從來の諸説を一々掲げてこれを検討されて居るのは、甚だ親切な敘述の仕方である。村度を許されるならば、ネルマン氏の研究が著者に多くの影響を與へて居るやうである。然しこのことは本書の價値を決して損するものでないこと勿論である。終りに私は、本書に次いで尙他の勞作が近き將來に同一の著者によつて現はれることを望んで、本書紹介の筆を擱く。

前號(第三十二卷) 目次

●徳川時代の農業論

野村兼太郎

●名子賦役と刈分小作

小池 基之

——小本川流域地方の名子制度(一)——

●古代の土地所有並測地記録

井上 芳郎

——紀元前四—二千年代 シュメルバビロン時代——

●チュルゴオ「價値と貨幣」

山内 毅

●經濟組織としての社會主義と資本主義

加田 哲二

A. C. Pigou, Socialism versus Capitalism 1937.

●ジョシフ・マッシ編一千五百五十七年より一千七百六十三年に至る商業・通貨及び救貧法に關する書簡及び小篇蒐集目錄

高橋誠一郎

●一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
●一ヶ年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共
●一ヶ年分金五圓四拾錢

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

●營業に關する用件は發賣元宛

●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十三年二月廿日印刷納本 每月一回一日發行
昭和十三年三月一日發行

三田學會雜誌 第三十二卷 第三號
編輯者 江 田 範 保
發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
印刷者 金子 鐵 五 郎
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子活版所

發賣元 丸善株式會社三田出張所

電話三田(45) 二九二六番
二九二七番
二九二八番
振替口座東京 一八五二番

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會

振替 慶 應 塾 芝區三田二ノ二 東京一八二〇四番